

マ
レ
・
サ
カ
チ
の
た
っ
た
ひ
と
つ
の
贈
物

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

自分の病名を初めて聞いたとき、おそらく彼女は、入学してまだ間もない、若葉の見える大教室での授業を思い出したにちがいない。

「では諸君は、そういうふうに粒子のように衝突や生成をしたり、波のように干渉現象を起こす、この電子や光がほんとうは何だと思う」

未来は我がものと信じ切った学生が四、五人手を上げる。彼女は上げない。でも、目は好奇心で満ちている。

教授が、ひとりの学生を指さす。背の高い学生は立ち上がり、答える。

「粒子でもあり、波でもある」

自信に満ちたその顔を見て、教授は苦々しく笑い、降参したように片手を上げる。

「アインシュタインは、りょうしりまがく量子力学に終生反対し続けた。量子力学が描くミクロの世界の姿が、彼の信念に反していたからだ。量子力学で描かれる世界の姿とは、こうだ」

教授は教壇の上の野球ボールを手にとって、上に放り投げてはキャッチする。

「電子や光、この世界をつくるすべてのミクロな存在は、観測していないときは波のように存在し、

確率的な広がりとして存在している。ところが、我々がその存在を観測すると、必ずこの野球ボールのように粒子としてしか観測できない。つまり、この世界のすべては波でもあり、粒子でもある。しかも、波でもあり粒子でもある量子は、位置と速度を同時に確定できない。『どこにどうあるか』を確定できないのだ」

先の学生が誇らしそうに隣の友人をこづくのを、彼女は微笑ましく眺める。

「この量子力学の世界観は、こう告げる。ピサの斜塔からボールを落とせば何秒後に地面に落ちるか計算できるように、スペースシャトルが宇宙ステーションにドッキングすることは計算によって実現できるように、現在状態の全情報を把握すれば未来は確実に予測できるという従来の科学は、世界の真の姿ではないと。この世界を支えるミクロのレベルでは、現在の状態をすべて明快に把握することなどできないし、一瞬後にいかなる状態になるかは確率的にしか把握することはできない。つまり世界はどこまでも曖昧で、非決定的なのだ。アインシュタインは、世界は明晰であると信じていたがゆえにこの世界像を許容できず、こう言った。神はサイコロ遊びをしない、と」

不思議だと思わないか、と教授は問いかける。学生たちは何とも思わないといった顔で見返している。そんなことはもはや当たり前のことだと、巨人の肩の上から世界を眺め下ろしている。

よからう、という表情で教授は野球ボールを手で握る。ボールが手に包まれて見えなくなる。大きな手だな、と彼女は思う。直後手が開かれると、ボールは消えている。学生たちは目を見開き、若葉のようにざわめく。

ふいにとん、とん、と聞こえる音の方を学生たちが振り返れば、扇形の雛壇の一番上の机から、野球ボールが弾みながら落ちてきていた。学生たちはやられたと教授のほうへ振り向く。

教授は片頬をつり上げた笑みを見せている。

「不思議を感じられなくなったら人間は終わりだぞ、諸君。不思議を感じる力こそ人間のすべての原動力だ。これはまぎれもなく不思議なことだ。そうではないか。今この教室にいる諸君ひとりひとりが、誰も自分を見ていないわずかな瞬間に波となつて分布して消えたかと思えば、次の瞬間遠く離れたナポリにいるようなものだ。これが不思議でないとするれば、何だというのかね？」

2

彼女が生まれたのは、海のそばの町だった。毎日、近所の子と海に飛び込みに行く少女時代を過ごした。遠泳ではどの男の子よりも沖に行き、貝の模様の不思議さを飽くことなく眺め、繰り返す波音を夕暮れに聞く日々だった。

彼女が生まれたのは、それからまもなくワールドダウンが訪れた、そういう時代だった。中国のバブル崩壊に端を発する、アメリカ、日本、フランス、インドの同時経済破綻はたん。ニュースが黒い色に染まった一年、ブラックイヤー。

世界中を襲った激震の波は、しかしこの片田舎に届く頃には細波さざなみとなつており、時代から取り残された町の生活は時が止まったように変わることなく、時折酔っぱらった大人の愚痴が長引くことがある程度で、まして明日晴れるかどうかそが人生の重大事であった彼女の日々が揺らぐことはなかった。むしろ漁師を営む最長老に見込まれて後継者に指名されたことの方が彼女にとっては大事件であり、本人も最初はその気がなくもなく、現に周りの女子が髪の毛や爪の色やポタコンのデコレーション

ンに関心が向く中で、ひとり朝とも呼べぬ時刻に早起きしては最長老の船に乗り、朝日と鳥と共に帰港していた。

それなのになぜ彼女は漁師にならず、大学に行くことにしたのか。最長老は、水より薄い日本酒を呷りながら、歯の欠けた口を開いて言うのだった。

「海があの子にとって小さすぎたのだ」

3

「量子病」

「そうです」

「量子、病」

「便宜的な名称です」

「あの」

「はい」

「本気ですか」

「私が冗談を楽しんでいるように見えますか」

「見えない、ですね」

「お気持ちは分かかりますが、一通り聞いていただけますか」

「お願いします」

「これが固有の、ある共通する現象として認定されたこと自体、最近のことです。貴方は物理学を専攻していたということなので、ご理解が早いと思いますが」

「私以外にも、いるということですか」

「他では説明のできない、類似した現象、いえ、症状は確認されています。しかし、数は多くありません。極めて稀だと言っている。ですが、ええ、いないことはない」

「どれくらい確認されているんですか」

「この現象がこう仮称されてから、ですが、ようやく二桁に達したか、というくらいでしょうか。正確な数はわかりません。まだ研究が体系立ってすらいらないのです」

「そう、なんですか」

「ちょっと違う説明を試みてもよいですか。気休めに過ぎないかもしれませんが」

「お願いします」

「神隠しという現象はご存じですか」

「はい。あ、聞いたことがある、ということですか」

「ではこういうのはどうですか。人が空から降ってくる。あるいは、行方不明になったと思ったら遠く離れた場所で発見され、宇宙人に連れ去られていたと証言する」

「つまり、この量子病に相当する現象は昔からあったけれど、その現象を量子病とみなしたのが最近のことであるだけだと」

「人間が壁をすり抜ける確率は、ゼロではありません。限りなくゼロに近いが、現代の物理学はゼロと言いきりません。それと同じく、この現象も、確率がゼロとは言いきれない以上、小数点以下に気

の遠くなるほどゼロが続く確率でも、生じないとは言えない」

「論理的には」

「論理的には」

「でも、現代の物理学に照らせば、これだけ大きな個体が量子的ふるまいをするとは考えにくいと思うのですが」

「既に分子レベルで干渉縞かんしょうまの観測には成功しています」

「ひとつの分子と私の身体では、スケールが違いすぎます」

「仰る通りですが、分子と貴方の身体がスケールの的には地続きであることも事実で、ただの確率の大小の違いであるという解釈もできることはできる」

「うーん」

「ここまで理解してくださいだけでもすばらしいと思います。普通は、量子力学の講義で三日かかります」

「仮説に過ぎない気がします」

「仰る通り、仮説に過ぎません。証明ができるかどうか」

「そうですね」

「逆に伺いたいのですが、こうなる原因に心当たりはありませんか？ 量子力学もご存じの貴方なら、何か仮説が思い浮かぶのではないかと。実は、不謹慎な言い方をお許しただければ、少し期待をしているところもあるのです」

「こうなった、原因」

「最初に跳とんだときにしていたことで、引金となっていそうなこととか」

「あの、ひとついいですか」

「何でしょうか」

「量子病は仮説でしかないのなら」

「残念ながら、仮説です」

「もっと単純な仮説もあるのでは」

「オッカムの剃刀カミですか」

「単純に、テレポーテーションという仮説はないのでしょうか」

「では貴方は、ご自身が経験している現象がテレポーテーションだと思われませんか。当事者として」

「ああ」

「いかがですか」

「違いますね」

4

ピットに、楽団が入ってきた。

オペラホールに満ちていたさざめきがひいていく。金髪の青年は、左隣の席に目を向ける。そこに
は、八日前に出会ったばかりの東洋人の女性が座っていて、視線に気づいて笑い返してくる。青年の
心配をなだめるように。彼女が着ているのは、もちろん青いドレスだった。

青年は、女性とオペラを見に来るのは初めてだった。いや、女性と二人でどこかに出かけることが初めてだった。この女性に限らず、母親以外のどんな女性とも、という意味だ。青年はそうした時に特有の身体状況になっていた。つまり、鼓動が速まり、汗をかき、落ち着きなく辺りを窺いながらも、いかにも落ち着いた振りをしようと、いっそう不自然な挙動をして、つまりは緊張して舞い上がっていた。

初めは控えめに、おずおずと、先陣を切っていいのか戸惑うようにオーボエの音がピットから聞こえてくる。他の楽器が、弱気な同級生を励ますように続く。初めはばらばらだった音が、お互いを窺いながら、徐々に足並みをそろえていく。

「好きな」

彼女が咬くばいた。青年は急な告白かと驚いて振り向く。

「この調音の時間が、世界で一番好き」

ああ、と青年は自分の勘違いを隠して頷く。

弦楽器の音が、管楽器の音が、ひとつの音になっていく。音が大きくなっていく。ひとつとなった音が、ホールに満ちていく。照明が、緩やかに落ちてゆく。

「世界が始まる直前の、何かが生まれる予感だけがある。きっと世界が生まれる前には、こういう時間があつた」

ホールを埋め尽くす紳士淑女の後ろ姿が、影になっていく。

「それを作っているのは、リズム。初めはバラバラだったリズムが、徐々にひとつに調和していく」
彼女の声は小さくて、青年にしか聞こえないほどだった。

「リズムが最初にある。リズムが重なり合って、世界は生まれる」

拍手が起こる。指揮者が、ピットから愛嬌のある笑顔を見せる。

ホールが、闇に沈む。

静けさがある。

世界が生まれる前。

緞帳が、上がっていく。

光に満ちた世界が、爆発する。

音の洪水が、始まる。

青年は舞台上で繰り広げられる愛憎劇を見ながら、頭の片隅で彼女の言葉を考えていた。

一幕が終わり、闇が訪れ、世界が弾けるような拍手の中、橙色の光がホールに戻る。

青年が左隣を見ると、そこには誰も座っていない布張りの座席があった。

名も知らないままだった、とそこで初めて気づく。

5

坂知稀。

彼女は量子病に冒され、世界中を跳躍し続ける運命を背負った。跳ぶ先々で、彼女は人と出会った。ポータブルコンピュータに接続すればすぐにブログにでも何にでも記録できるのに、彼女はネットの上にとどんど何も残さなかった。確かに彼女は跳躍の際、ポタコンを一緒に持ってゆけなかった。だ

がこの時代、机上設置型の大きさのものから、本のように二つ折りにしてポケットに入るサイズのもので、ポタコンなどどこにでもある。

彼女が残したものは、たったひとつだけだった。

6

「その運命を知った時、絶望したか」

薄暗い書齋にあって車椅子に座り、老人は問う。

「いいえ」

書齋の両壁に並ぶ無数の本に囲まれて、彼女は答える。

「一カ所に留^{とど}まれない。世界のどこに跳ぶかも分からない。生きるとは、積み重ねることではないのか」

「貴方は、積み重ねたのですか」

「私ほど、積み重ねた者はいない」

違うか？ そう問うように、老人は目でゆっくりと周りの書棚を示す。歴史を吸った書物が並んでいた。そこには、人の皮で作られた本もあると言う。彼女は、歴史の声に耳を傾けるように、周りを見渡す。

老人に反論できる人間は、この世界には存在しないのだろう。反論した者は、例外なく彼の前から姿を消した。だが、それも昔の話。今はそんな人間も、いない。

「貴方は誰よりも溜めた。でも、積み重なっているようには見えない」

「何が違う」

「ここには、きっと何も育たない」

「所有するのは、溜めるのは、人間の太古からの欲求だ。いや、違う。生命の欲求そのものだ。生命とは情報を溜める活動のことだ。そして、お前は溜めることさえできない」

老人は朗々と言いつ述べる。彼女が黙っていると、居住まいを正して告げる。

「約束の七日間は過ぎた。答えを聞こう」

数多の人間の運命を宣告してきた声は、今また一人の人間に審判を告げることく低く響く。

彼女は、口を開かない。

逡巡しているようなその表情に、老人は裁判官が小槌を打ち下ろすごとく告げる。

「そのような運命を負ったまま、お前は何を望んで生きるといふのだ」

7

病気が判明してからまっさきに彼女が行ったのは、語学学習だった。それは周りが目を見張るほどの集中ぶりだった。起きている時間はすべて語学の本とラジオの講座に捧げた。ラジオの音と、それに続いて彼女自身が素振りのように繰り返す発音だけが漏れ聞こえた。寝食を忘れて倒れかけるほどの打ち込みようだった。初級英語の次はビジネス英語、ビジネス英語の次は実践英会話と番組を梯子して、日本語で育った己の身体と感覚に英語を擦り込み馴染ませるように没頭した。やがて英語

がそれなりの水準になったと判断したのか、スペイン語、インドゥー語、フランス語へと移っていった。もちろん、既にベバルは全世界に普及し、小学生の使うポタコンにさえ入っていた。だが、彼女は鬼気迫る集中力で外国語を自らの身体に叩き込んだ。

8

ジャン・アンペールは、ぼさぼさに伸びた黒髪をかくと、眼鏡を押し上げながら、またブラウザの更新をクリックした。ほとんど無意識の動作だった。メールソフトを立ち上げ、新着がないことをまた確認する。

久しぶりの休日だというのに、どこにも行かず、行く気力もなく、昼前に起きてからずっと、曇天どんてんの見えるアパートマンの部屋で、溜まった洗濯物にさえ手も着けずに、何をするでもなく過すごしていった。

チーズの残りを昼飯に、宣伝メールをゴミ箱に捨て、ネットのブックマークを一通り巡回し、ヒーを淹いれ、さっき見たSNSをもう一度開いたが何も目を引く更新がなく、テーブルの上の雑誌をまとめ、窓から顔を出して降り出すかどうかを確かめ、また新着メールがないかをチェックし、ポータルサイトに新しいニュースがないことを見て、見たばかりのブックマークをまた二つ三つほぼ無意識に訪れ、動画サイトを開いたものの何を見たいのか検索ワードが浮かばず、首を鳴らしながら食べるものがないか台所を探しに立った。

別れたてのスペイン系の恋人からの連絡は、もちろんない。

あまりに見るものを思いつかないので、ブックマークに残っていた、書き手が故人となった後も遺されているブログの過去記事を読んでいたら、そのアンテナリンクで日本人ブロガーのサイトが炎上しているのを見つけた。クラッカーを頬張りながら読めば、先日の某国大統領の「祝祭資本主義」という発言を批判していた。

ワールドダウンによって、資本主義という制度は死に体であることが露呈した。アフリカと南米の勃興で国家間格差の平準化が進んだワールドフラットが訪れ、資本主義は最後の呼吸を全世界的な富裕層と貧困層の格差に求めた。結果、全世界に点在する一握りの富裕層が超多数の貧困層を支配するのが現在の世界である。「戦争でなく、全世界的祝祭で経済を活性化する」という祝祭資本主義なる花火は、ワールドカップ、オリンピックをはじめとした祝祭で貧困層を目くらましし、呼吸停止しかけた資本主義に心臓マッサージをするだけで、つまりこれは資本主義の恩恵を吸う富裕層の戦略に過ぎない。

学習型翻訳ソフト、ベバルが標準装備されたブラウザは、日本語で書かれたそのページをほぼ完璧にフランス語に翻訳して表示している。休みの日にまで、退屈をしのぐためならこんなものに目がいってしまうのかと自嘲しながら、ジャンはブログへの反応を確認する。全世界から寄せられたコメントは、賛否両論だった。ベバルブラウザのお陰で、ネット上は言語の壁も国の壁も越えた空間になった。しかし、それだけ国も立場もまったく異なる者が同じテーブルに座るようになったわけで、実際コメントにはあらゆる角度の発言が並んでいた。

いくつかのコメントや関連記事をたどっていると、最新ニュースに「永遠の楽土」という言葉を見つけた。

永遠の樂土計画に、サイエンスミルズが出資表明。

ふと、恋人の声が部屋の空気にまだ漂っているように感じて、振り返る。

そちらには、壁際のベッドがある。

その上に、青い服を着た見知らぬ東洋人女性が座っていた。

彼女は、申し訳なさそうに苦笑いをしていたが、しばしジャンの反応を注意深く見ていると、その薄い唇を開き、発音のおかしなフランス語でこう言った。

「ボンジュール」

9

初めて「跳んだ」時、たまたま青い下着をつけていたのは幸運だった。大学の図書館にいた彼女は、気がつくと、信州の一人暮らしの老婆の部屋に、下着姿でいた。老婆はひとり、死に瀕していた。現れた彼女を娘と思い込み、手を握り、何を言っているか分からない言葉を彼女に伝え続け、涙を流していた。彼女は手を握られたまま、下着のまま、老婆が死ぬまで、傍にいた。老婆が息を引き取ると、部屋にあった電話で救急車を呼び、箆筒にあつた老婆の服を着て、玄関の鍵を開けた。彼女は自分で、今どこにいるのか、自分に何が起こったのかを考えながら、部屋で救急車の到着を待った。薄暗い中で、両手をきつく結んでじっと座っていた。

救急車が到着した時、部屋には老婆の亡骸なきがらだけがあつた。

彼女がそこにいたのは、二時間二十七分だつた。次に彼女がいたのは、海のそばの町、故郷の実家だつた。

10

初めの頃は、短間隔で二、三度跳ぶと、またしばらく落ち着く期間があつた。しかし徐々にその期間が短くなつて、彼女を感じ取つた。

ある日、学会に参加した彼女は、数人の他大学の研究者と交換会をしているまさに最中に跳んだ。つまり彼らの面前から忽然こつぜんと消えた。

この現象につけられた仮称、つまり量子病という名を彼女が知ることになつたのは、これがきつかけだつた。

最初に頭に浮かんだのは、なぜ自分が、だつた。そしてこれから自分はどうなるのか、と思ひは及んだ。地面がなくなつて宙吊りにされたような戸惑いのただ中であつた。だが猶予ゆよはなかつた。猶予がないことだけは分かつた。いつどこに跳ぶか分からない。感情は嵐のように吹き荒れていた。でも、ひとつひとつ手にとって確かめ、味わう暇はなかつた。すぐに、しなければならぬことがあるかを考え始めていた。強しいられてどこに行くかも分からない旅に出るようだつた。何をすべきかめまぐるしくまとめていく頭に、次第にある予感がせりあがってくる。

始まるんだ。

何が？

分らない。

けれど、始まるのだ。

想像もつかないことが。

きつと、明日さえ予想できない日々が。

気づけば書店に英会話の本を買いに走っていた。

II

この現象に見舞われてから量子病という名を知るようになるまでの四カ月間、彼女がもっとも多く跳んだ先は、実家だった。実家には、母だけがいた。板前だった父は既に他界していた。飲み屋だった実家はたまに開く定食屋となり、母は気が向いたときだけのれんを出し、厨房ちゅうぼうに立っていた。

娘の突然の出現に最初はもちろん驚いていたが、頻繁になるともはや気に留めることもなくなった。「また来たの」

の一言で片づけ、洗濯物を取り込み、定食屋の準備をするようになった。本人より早く慣れるのか、と母の強さに苦笑した。

彼女のひとまとまりの跳躍現象は、実家を最後に落ち着くことが多く、母は大学に戻る彼女に電車賃を渡すのだった。

彼女は母に、青い下着と服を買い溜めておいて、と頼んだ。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。